



2004年度 岩見沢校学士論文等概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9364

2004年度 岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

教育発達臨床系

学校教育

今年度は、以下の13編である。

「中高一貫校の中の中等教育学校」「今の子どもたちに育みたい社会力」「大正デモクラシー期における女子教育運動」「子どもたちの中の天皇制」「マンガと英語」「現代の家族が抱える問題に関する考察」「水道方式と陰山メソッド」「小学校算数の学習指導において習熟度別指導は有効か」「ミャンマーの英語教員養成の在り方について」「出生前診断における選択的中絶についての研究」「発達障害幼児の母親から見た父親・家族との関連性についての研究」「特別支援教育における地域ボランティア人材の活用に関する研究」「知的障害養護学校における持久走トレーニングにみられる個人内タイム差に関する研究」

心理学

今年度は以下9編の論文が提出された。

「問題を含む絵図を用いた看図作文の授業開発」「音楽聴取が気分及ぼす効果」「『伝え合う力』を育てる『看図作文』指導法の検討」「子育てに関する研究」「乳幼児のシグナルに対する大人の反応性」「『手引き』を用いた『看図作文』指導の実践」「燃え尽きやすい教師と燃え尽きにくい教師とは?」「中国人留学生に対する助詞指導法の検討」「青年における自己愛人格と死生観の関連性」いずれも実証的な研究である。今年も良い論文が多かった。

総合教育

第一研究室は、「動物飼育を伴う学習事例の分析と考察—学習活動に内在する教育原理に着目して—」、「学校教育におけるキャンプ実践とその教育的効果—体験活動の教育的効果に着目して—」、「道徳教育の展開と展望—道徳教育の問題史の整理を通じて—」、「思春期の不登校に対する自立支援のあり方とその方策—公教育とその関係機関の連携の検討—」の4本が、第二研究室は「アイヌ文化振興法(1997年)がアイヌに関する教育実践に与えた影響の一考察」、「少年法をめぐる現況と課題」の2本、計6本が提出された。

社会・言語教育系

国語

近代文学2、国語学(日本語学)3、国語教育2の計7篇の論文が提出された。そのうち、①「日本語における数量表現について—数量名詞を中心に—」、②「泉鏡花研究—大正期の鏡花について—」、③「ファンタジー教材の考察—小学校国語教科書から—」の3篇がすぐれていた。①は大量に用例を収集し、さまざまな角度から数量表現についての考察をくわえており、卒業論文の水準をはるかにこえる大作である。②は難解とされる泉鏡花の戯曲、小説を丹念に読みこみ、叙述に即した論を展開している。③は小学校国語教科書のすべての物語教材を読みこみ、11編の

物語をファンタジー教材として位置づけ、作品の構造を分析したものである。全体的に卒論執筆へのとりくみの遅さが、内容的に致命的な影響をおよぼしているといえそうである。

書写教育

本年度は以下の4篇が提出された。①「左きき児童に対する書写教育を考える」、②「龍門造像記とその考察」、③「王羲之—その書と与えた影響」、④「唐太宗の生涯と書」。

①は教育実習で感じた一つの疑問に対して、現時点で考える解決策についての考察である。②、③、④はいずれも、4年間の書活動の中で、深く関わった古典を題材として、その書体験を振り返る内容となっている。これらの古典は卒業制作作品の対象ともなっており、言葉の中にその作品に込めた思いが感じられる。

外国語

イギリス文学では、オスカー・ワイルド、W・ゴールディングの作品を論じたものが2編、アメリカ文学では、スタインベック、ヘミングウェイ、J・アービングの作品論が3編、文化研究では、シオニズム、ヒップ・ホップ音楽の背景を扱った論文が2編、英語教育では、英語の読解と先行知識・関心との関係、Planningと言語運用との関係、単語の聴解に関する条件の研究、特定の言語要素（単語、文法）の強調と学習効果に関する研究の4編が提出された。

本年度は全体的に卒論への取り組みが遅く、内容および英語表現において完成度に欠ける論文がいくつか見受けられた。今後テーマの選び方や論文作成の段取りなどについて指導してゆく必要性を感じた。

歴史

本年度は、日本史分野4編、外国史分野3編の計5編の学士論文が提出された。その論題は、以下のとおりである。

近藤史仁「織田信長が目指した政権構想—朝廷との関わりを中心に—」、大塚秀樹「文久期以降の武力討幕派による政略—『討幕の密勅』の背景を中心に—」、厚谷恵美「『非武』の島における戦闘—民衆の沖縄戦—」、山本貴史「太平洋戦争開戦期の日本—『意思決定』の会議から見る政治動向と過程—」

宮代順庸「主役になることができなかつた人々—ロシア革命時の農民—」、西岡紗希「JEWS—なぜユダヤ人は虐殺されたのか—」、本多正典「アメリカ人とは何か—群れたがるアイデンティティー—」

例年どおり、日本史では史料に立脚して論を進めていこうとする志向性が、外国史では現代的関心から思考を深めていこうとする傾向が、それぞれみられた。いずれも一定の水準に達した叙述が叶ったように感じられる。なお近年の傾向として、文章の推敲が甘い点が目立つ点は遺憾である。以後留意した指導に心掛けたい。

法律学

3名が無事、卒業論文を提出した。「性差別の売買春と女性の自己決定について—考察—売買春のない社会を目指して」は、昨今の性的自己決定権の議論に引き寄せられて、売春者の労働環境整備を論じる風潮に対抗し、むしろ買春禁止をとの主張をなす見所のある一編となった。「児童虐待防止制度に関する—考察」は、法

改正にもふれたが、それよりは現実に毎日のように起きている児童虐待事件がなぜ止められないのかという疑問から、新聞等のメディアからの情報も積極的に駆使した結果として力作になった。「多様なライフスタイルを支える法制度についての一考察」は、問題領域が広く難しいテーマではあったが、現在の婚姻・家族制度と絡む社会保障制度等のあり方に疑問を投げかけた点で評価すべきものであった。

社会学

社会学グループでは、本年は2編がまとめられた。女性の晩婚化・非婚化に関する研究は、近年日本でも目立つようになったこの傾向の客観的諸要因と主観的諸要素を分析したものであり、とくに青年の意識の一典型としての学生意識の調査（本校内で実施）が興味深く、特徴と意義が見出される。環境論に関する研究は、地球温暖化問題に対象を絞って、その諸側面・諸問題を検討したもので、とくに課題への対応に関する先進資本主義諸国内部での分節化に関する考察が示唆的であり、有意義であった。

哲学・倫理学

今年度の卒業生は一名で、卒業論文も「ニーチェ思想から辿るキリスト教的な神の起源」一篇だけであった。この論文は、そのタイトルが示すように、ニーチェの思想を手がかりとしてキリスト教的な神観念の成立を追究した意欲作である。『ツァラトゥストラはこう言った』『善悪の彼岸』『道徳の系譜』といったニーチェの主要著作に取り組んで、自分なりの見解をまとめた努力は、高く評価されるものである。

社会科教育

本年度の提出論文は2件である。「学校教育におけるメディア・リテラシー～社会科授業への提言～」は、メディア・リテラシー教育の主眼が「批判的思考」の育成にあることをふまえて、小学校社会科5年「情報通信産業」の授業5つを分析したもので、授業実践の場では「批判的思考」の視点が充分ではないことから、学習モデルの作成に意欲的に取り組んだ。「月形町の地域教材～樺戸集治監の教材化をめざして～」は、副読本と指導計画の分析を通して、樺戸博物館が学習活動に必ずしも活用されていないことから、調査活動を取り入れた指導計画の作成を試みたものである。

自然・生活教育系

物理学

今年度は5編の卒業論文が作成された。「霜の生成と形態に関する実験的研究」(河端将史)は、冷却板に霜の結晶を成長させてその形態を観察し、条件によっては板状結晶と柱状結晶の霜が混成して成長するなどの特異な現象を見いだした。「我が国における雪の研究過程に関する研究－土井利位の『雪樺図説』と中谷及び小林のダイヤグラムを通して－」(中埜渡美佳)は、利位の著作を現代的視点から検討し、また、雪結晶成長のダイヤグラムに関わる問題点を指摘した。「環境教育の地域特性に関する考察－積雪の教材化を例として－」(森本早紀)は、地域的な環境問題を学校教育に取り入れるために、積雪を教材として活用することを提起した。「雪庇の成長機構と抑制方法の研究」(安達聖)は、寒冷地では身近な現象である屋根の雪庇を題材として、雪庇の成長メカニズムを吹雪の発達の見点から研究した。「低

温風洞による飛沫着氷の模擬実験」(吉川高利)は、過冷却水滴が円柱物体に衝突して着氷する現象を風洞で再現し、らせん状に張った布が着氷を抑制する可能性を指摘した。

生物学

(植物分野) 小野寺裕介「篠津湖産ツノモの培養および岩見沢市水田産パンドリナの生殖的隔離について」および、丹野奈保子「ボルボックスの有性化における温度および明暗周期の影響」の2編。いずれも従来からの課題をさらに追求したもので、それぞれ生殖的隔離の実態、および赤色、青色光の影響を明らかにしたのは大きな前進である。

(動物分野)「キイロショウジョウバエにおける性的二型神経細胞群の解析」(田澤辰典)では、脳の特定の神経群に雌雄差があることをみだし、その決定がどのように遺伝的に制御されているか調査した。「キイロショウジョウバエにおける細胞死関連遺伝子の発現パターンと細胞内局在の解析」(元山一希)では、翅表皮細胞死の制御分子の発現パターンを調査し、ミトコンドリアに局在していることを見いだした。

地学

2004年度の卒業論文は、樺戸山地南部月形地域の新第三系の層序と古環境である。本研究の主要課題は、①海成中新統奔須別層の地質年代と古環境、②調査地域周辺における新第三系の層序学的再検討、③調査地域の新第三系の微化石分析に基づく地質年代の決定である。

①については、奔須別層から亜熱帯性貝化石群集を発見し、具化石や有孔虫化石の解析により、古環境的背景を明らかにした。②に関しては、詳しい野外調査により、新第三系各層の層序関係をほぼ確定することができた。一方、③については、年代決定に有効な珪藻化石が産出しなかったため、新たな情報は得られなかった。

以上、綿密な野外調査データに加えて、室内作業でも重要なデータが得られ、月形町周辺地域の新第三系の層序や古環境の解明に新たな知見をもたらした。

理科教育

今年度は、杉町直子「地学分野のパッケージドプログラムの実践的検討」および富田雄介「微化石による定山溪地域の古環境および年代の検討」の2編が提出された。前者の研究は、アメリカで開発された体験的な学習教材集のうち「岩石・鉱物」関係の学習案を翻訳し、それを日本の学校教育に導入することの適否について、中学校での授業実践をふまえて検討したものである。後者は、これまで不明な点が多かった黄金湯温泉～簾舞にかけての地層を対象にした札幌市の海牛化石調査団との共同研究で、野外地質調査と微化石の詳細な研究に基づいて、地層の堆積年代がおおよそ800万年前であること、1000～2000mより深い所で堆積したと考えられること、等を明らかにしたものである。

生活科学科教育

「『暮らしの手帖』に見る日本人の生活要求」「良妻賢母教育にはじまる家庭科教育の課題」「大学生における偏食の実態と意識に関する研究」「環境保全の態度形成に向けての『衣生活教育』からのアプローチ」「中学生期の心と体を育てる学校給食・給食指導」「シックハウス症候群とシックスクール症候群の実態とその対策」「たばこ問題に対する一考察」「学校教育におけるIT利用の教育効果と諸問題について

の考察」「大学生の食生活・食に対する意識及びスポーツ経験者の食事指導・栄養教育に関する研究」「ユニバーサルデザインの視点から考える住生活空間の在り方」「若者の服装における着衣意識と衣生活行動のかかわりに関する調査研究」「日本でうどんが広く食べられるようになった背景」の以上12編の論文は、衣生活・食生活・住生活・家庭生活・着衣・学校給食・健康・文化・教育を視角に生活を追究した。

体育・芸術教育系

音 楽 音楽における「癒し」効果—人気CDアルバム収録曲の分析と気分誘導—青木理英

鳥歌の独自性とその背景—三線と鳥歌の結びつきを通して—石田麻衣
アイヌ民族音楽について—歌謡と楽器を通しての—考察—奥村久美
音楽科教育における「ボディパーカッション」の新しい可能性—山田俊之の授業実践を越えて—数田浩樹
ピアノアンサンブルの現状とピアノ教育における連弾の重要性—〈ハンガリー舞曲第5番〉を題材に考える—熊谷香澄
小学校における発声指導の考察 黒田博子
ポピュラー音楽の特質を生かした小学校音楽科の授業展開 修田真恵
学習指導要領・実践から考察する小学校中高学年の合唱指導 竹林直也
ユーフォニウムの歴史と現状についての—考察—日本におけるユーフォニウムの認知と需要—延 早苗
フランツ・リストの「超絶技巧練習曲第4番マゼッパ」の分析及び考察 安田綾香

美 術 絵画は2名。油彩は写実を基本にシュールレアリスム的手法で自我の表出を試みたもの2点と自画像、附随する論文はクリムトとその絵画理念について考察したもの。もうひとりの油彩は深海の生物群をファンタジー溢れる色彩で表現したもの2点と自画像、論文は印象派とジャポニズムについての考察。工芸は1名、木を使ったテーブルとパーテーション、論文は自然素材がもたらす教育現場への影響について考察したもので、特に木を教育施設等に使用することの効果環境問題に絡めながら述べられている。美術教育は4名。これからのグラフィックアートの可能性を考察したものと、附随する作品は自分で選んだ本を広告するためのインсталレーションの試み。写真の記号論的理解と幾人かの写真家について考察したもの、作品はメールをする人たちを撮った組み写真。日本の伝統色の考察とそれを現代に生かすことの意義についての考察と作品は木彫りによる日本的装飾の試み。児童画の心理学的分析とその意義について考察したものと、友人たちの肖像写真によるインсталレーション。以上それぞれの表現と考察が深められていた。

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

現代の問題へのとりくみが多いのが教育グループの特徴である。インターネット普及と犯罪などの問題を豊富なデータをもとに論じた卒論は、ネット自殺が頻繁におこる現代に警告している（浮田真司）。コミュニティFMを調査した論文は本人もかかわっており、パブリックアクセスなど新しい課題を提起している（大森幹夫）。産業遺産については、特に赤平の炭鉱遺産を守る運動を取り上げた（佐藤昌憲）。

女子3人は女性の生き方にかかわる問題を取りあげた。「男女共同参画社会基本法」に関する研究は女性の生き方が変わることを予知させるものである（河口真由）。子育てを終えた主婦の生き方をアンケートで調査し、その可能性を明らかにした論文もあった（恒川沙織）。女性専門外来について調べ、その必要性を論じた論文はすべての女性に読ませたい力作である（佐々木久美子）。

社会教育コース・文化人類学グループ

今年度は、杉野達也「平和博物館における戦争展示に関する考察」、伊藤朋恵「札幌市における地名の由来に関する一考察」、大館弘和「小樽市外国人入浴拒否問題に関する一考察」、大西博之「近代化遺産の保存と活用に関する考察」、永倉香織「日本サッカーの近代文化について：コンサドーレ札幌サポーターの事例」、遊佐しのぶ「現代日本の入れ墨について」の6点であった。博物館・生涯教育にかかわる現在の問題を論じた杉野・大西の論考、北海道に特徴的な、地名（アイヌ地名の割合に関する分析を含む）・スポーツ（コンサドーレ札幌とサポーターとの関連）・現代的課題（外国人入浴拒否問題）を論じた伊藤・永倉・大館論文、若者のTattoo文化と現代的課題を論じた遊佐論文等、自らの興味や問題意識に基く論証がなされた。

社会教育コース・地域環境学グループ

庵真由子「北海道の海岸侵食問題」：小樽ドリームビーチや石狩浜等で海岸が大きく侵食され問題化している。こうした状況を道内の4海岸（小樽・日高・野付・函館）で独自に土砂を採取し、粒度分析した結果から考察した。その結果、必ずしも侵食類型には該当せず、要因は複雑だということが判明した。

社会教育コース・福祉グループ

福祉政策研究室からは、「少子化を考えるーデンマークを通してー」、「学歴と貧困ー若年者の不安就労からの考察ー」、「出生前診断ーいのちを選んで生むことを問うー」、「拒食症についてー自らの体験と社会病理ー」の4論文が提出された。

また福祉教育研究室からは、「日本におけるボランティア活動についてーボランティア活動は日常的な活動かー」、「知的障害者の障害の自己認知に関する取り組みについて」、「介護サービスを利用する高齢者の食事介助に対する援助者の意識についての一考察」、「施設内における作業活動の目的と就労支援に結びつかない原因についての一考察」の4論文が提出された。

いずれも丹念な背景分析や調査に基づく論文であり、高く評価された。